

ほ乳類とヘビクビガメの骨について

県立青少年センター 池田博明
県農政部畜産課 加藤千晴

1. 牛と馬と豚の骨

あちこちのopen land forestに、ほ乳類の骨が散在しているのが車窓から見えた。

ノーザン・テリトリー州のホワイトリリーの草原では、ほんの10m四方をとっても複数の骨が散らばっているのが観察された。そこで、たまたま目についた骨の一部を写真に撮り、少し詳しく観察してみたところ、馬と牛と豚の骨がみられた(図A~G参照)。

まず、Aは馬の左の前腕骨である。馬の前腕骨の特徴は尺骨(a)が退化する傾向を示していることで、撓骨(b)の中ほどで融合していることである。牛であれば融合した尺骨は撓骨の下端まで来る。この骨の尺骨は肘にあたる部分が途中で折れている。

Bは多分、Aの馬の右の上腕骨の一部(遠位端;体から遠い方)である。Aとは左右が逆のため撓骨頭窩(c)には、きちんとはまらない。骨の端部は取れやすいが、これは端部には成長のための骨端軟骨があるからである。加齢が進めば次第に骨端軟骨は消滅・骨化し、取れにくくなる。

Cは馬の蹄である。

Dは馬の胸椎であろう。ポイントになる部分(棘突起、椎窩など)が破損しているため、はっきり断定することはできない。

Eは馬の下顎右側の第四小(前)臼歯と下顎左側の第一大(後)臼歯、第二大(後)臼歯である。ただし、第四小臼歯は習慣的には第三小臼歯といわれるものである。これは第一小臼歯が化石馬では残っているが、現生の馬成体では消失しているためである。E'は咬合面を実物大で模式的に記したものである。小臼歯、大臼歯ともに咬合面に白くて硬いエナメル稜が複雑に露出する月状歯である。特に大臼歯の半島状のエナメルひだ(下顎で

は外側、上顎では内側になる)は馬属Equusに特有のもの。また、馬では小臼歯が大臼歯のような咬頭パターンを持っている。

Fは牛の手中骨である。馬の骨でないことは遠位端に縦稜(滑車)が2個あることで分かる。偶蹄目では指が2本あるため、手中骨の縦稜は2個あるのだが、奇蹄目の指は1本であるため縦稜は1個しかないのである。山羊や羊の骨であればもっと縦稜が高いし、手中骨の長さ等からみて、この骨は牛の仲間であろう。

これらA~Fはほぼ同じ場所に散乱していた。

Gの頭骨はやや離れた場所で山川宏さんが見つけたもので、豚の頭骨であった。下顎骨および口蓋部は破損して失われていた。頭頂骨後端の形態、頭頂骨と前頭骨の縫合線(e:冠状縫合)の形態、側頭線が切りたっていること等から豚の骨の特徴はよく出ている。眼窩上溝がはっきりしているので、比較的長頭の種類であったろう。

それにしても狭い場所に3種類もの動物の骨が残されているとは!さすがオーストラリアという感がある。

もっとも、これらの動物はオーストラリア大陸に植民団とともに持ち込まれたものである。1788年5月1日の植民地家畜リストには馬7頭、牛7頭、豚74頭のほか、山羊19頭、羊29頭、兎5頭が記録されているという。この後も家畜の導入は続いた。羊と兎の歴史は日本でも有名であるが¹⁾、馬や豚の歴史まで記されることは少ないようである。野生の馬や野豚に関して、オーストラリア博物館の編集したほ乳類の完全ガイド²⁾の記述を抜粋、訳出しておく。

“当初のオーストラリアの牧場は柵をしていなかったもので、馬の逃亡はよく起こった。それで、野生の馬(Brumbyとよばれた)は増えたが、その数

はさまざまだった。もとの品種もさまざまだったので、野生馬にも違いがあったが、地理的隔離や自然選択、人為選択によって現在認めうるタイプは2種類になった。オーストラリアの野生の馬 *Equus caballus* には、草原型 (plains type) とやや小さいが頑丈な山岳型 (alpine type) がある。増えすぎると伝染病や柵の破壊、牧草の消費、水場の汚染などの原因になるため、個体数調節のために撃たれて、ペット・ミートにされる。

野豚 *Sus scrofa* (Pig のほか、Razorback や Captain Cooker などとよばれることもある) は、ヨーロッパはもとよりチモール諸島やパプア・ニューギニアからも持ち込まれ、いまやもっとも重要なほ乳類の疫病の温床である。また、ヒト同様に盲腸の短い消化管を持つ雑食家であるため、食物の30%以上を占める植物繊維を消化利用することができない。特に野生のウマゴヤシのある時期、秋と冬には羊と競合する。春夏には穀物や牧草に損害を与える。豚は多少の腐肉を食べ、普通は死んだ豚も食べる。二週齢以下の子羊を殺して食べる野豚もいて、ほかの小型のほ乳類や鳥の天敵ともなっているのだろう。

暑いときには日の出から2時間以内に隠れ家を探して、ときに20頭以上の集団になり、使い慣れた泥穴でじっと寝っころがっている。日没近くになると水を探したり、泥の中で転げ回ったりし、夜半まで食物を探す。あとは休んでいるが、日の出近くにまた食物を探す。曇りや雨の日は一日中活発である。

条件さえよければ年中繁殖して増える。ディンゴが子豚の天敵だが、個体数の限定要因になるほどではない。1970年代の子豚の意図的な放逐がニュー・サウスウェールズの村や町近くの適地での急速な増加の原因と考えられる。”

2. ヘビクビガメの骨

ヘビクビガメの骨 (図H) はジャビルに行く途中の森林でガイドのテリー (Terry) が拾って見せ

てくれたもの。彼はNorthern snake-necked turtle と言っていた。だとすると、学名は *Chelodina rugosa* で淡水産。魚やカニ、貝などを食べているという³⁾。

ローマーの『脊椎動物のからだ』⁵⁾、『動物大百科12』⁶⁾、レーラーの『カメ』⁷⁾を参考にいくつかの特徴を解説し、若干の印象を記しておく。

ヘビクビガメは首を横にたたむ曲頸亜目 *Pleur-odira* に属し、曲頸亜目のカメは地質時代のある時期には北米、ヨーロッパ、アジア、南米、アフリカ、オーストラリアに生息していたが、なんらかの理由で絶滅してしまい、現在は南米、アフリカ、オーストラリアだけに生息している。現生のこの亜目はヨコクビガメ科 (*Pelomedusidae*) とヘビクビガメ科 (*Chelidae*) に大別される。

曲頸亜目のカメは生理学的には潜頸亜目のカメより進化しているとは考えられない。おどかさされて首を引っ込めても、首と頭の側面は露出したままだからだ。主要なちがいは曲頸亜目のカメの骨盤が背甲と腹甲の両方と融合していることである。潜頸亜目のカメでは骨の結合がない。

ヘビクビガメは南米、オーストラリア、ニューギニアから9属37種が記録されている。この科の背甲や頭骨が部分的に特殊化が進んで、潜頸亜目のカメに似ているので、ヨコクビガメよりやや進化していると考えられている。

さて、私たちが見たカメの骨では、下顎と前肢の骨、後肢の指の骨は失われていた。ほとんどの動物の前肢の骨はヒトのように鎖骨でつながっておらず、腱と筋肉で支えられているため、全身の骨格から離れがちである。首・後肢・尾の皮膚は乾燥縮小して残っていた。

背甲長は25cm、背甲幅は16cm、頭骨長は6.5cm、頭骨幅は4.2cm、首の骨の長さは16cmであった。この種の背甲は通常40cmあるというから、この個体は小さい方であろう。頸椎は8個から成る。第5頸椎、第8頸椎骨が両凸形でヨコクビガメ科と区別される(ヨコクビガメは第2頸椎が両凸形) という

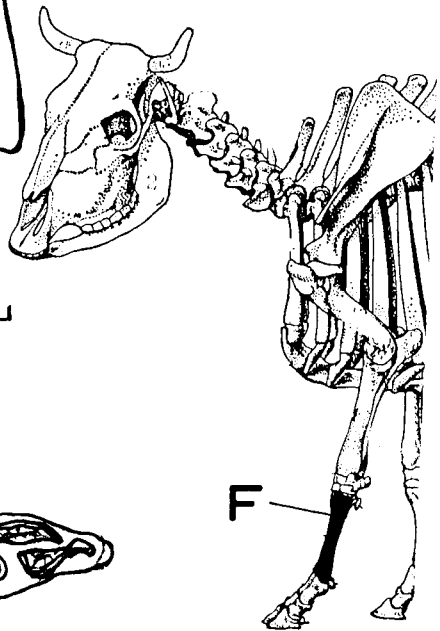
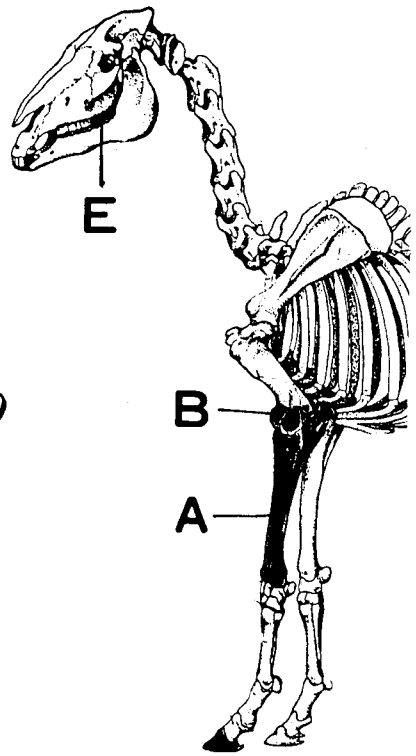
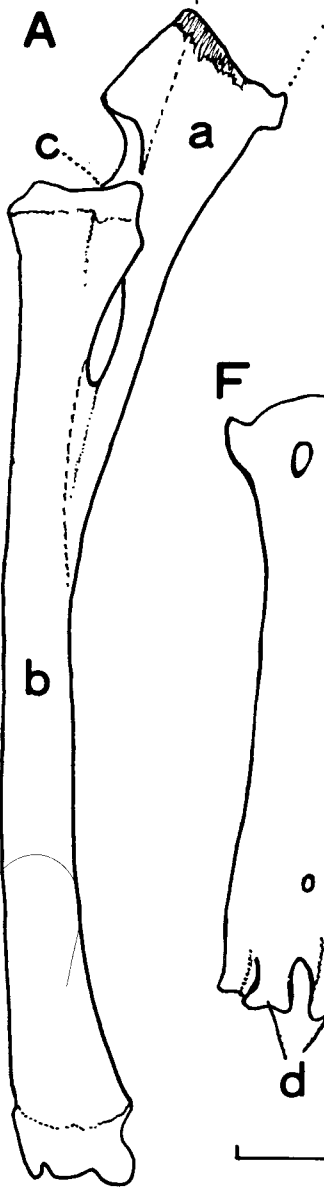
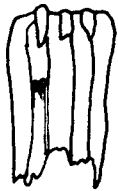
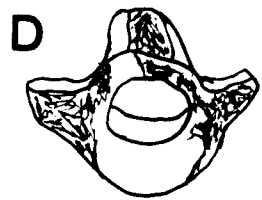
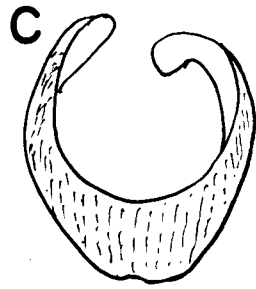
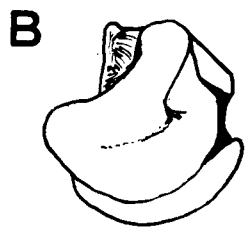
がこの両凸とはどういう形態を指すのかが明瞭でない。脊椎骨は背甲と融合していた。骨盤の上下はそれぞれ背甲、腹甲と融合していた（曲頸亜目の特徴のひとつ）。背甲と腹甲は側方で互いに骨橋によって連絡していた。甲らの構造は潜頸亜目のカメとは異なっていた。例えば曲頸類の背甲は椎甲板が5枚で片側の肋甲板が4対であるが、潜頸類はそれぞれ4枚、5対である。

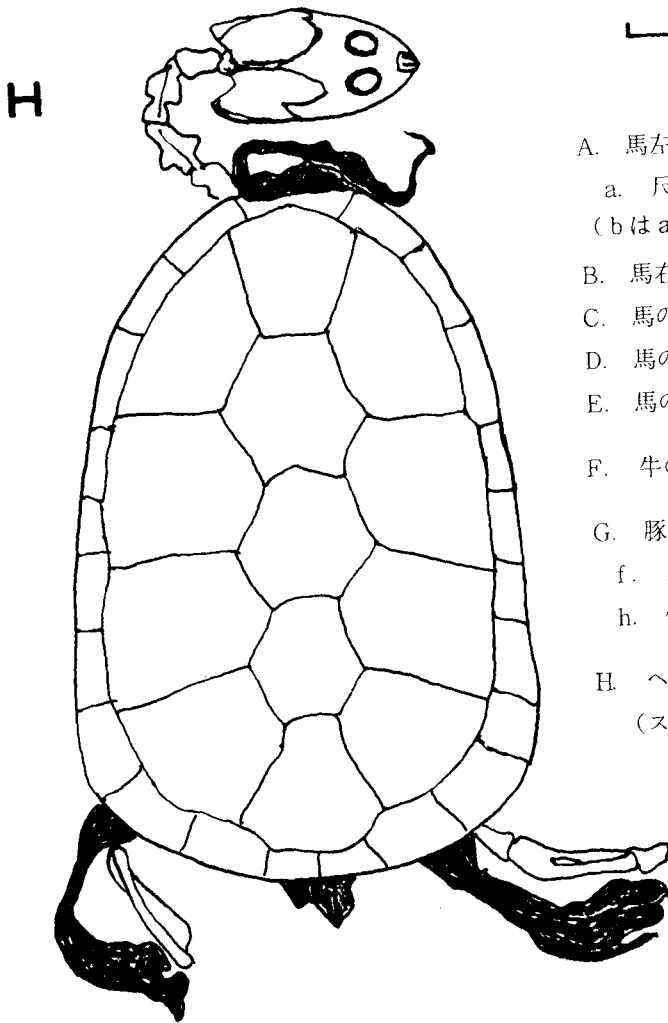
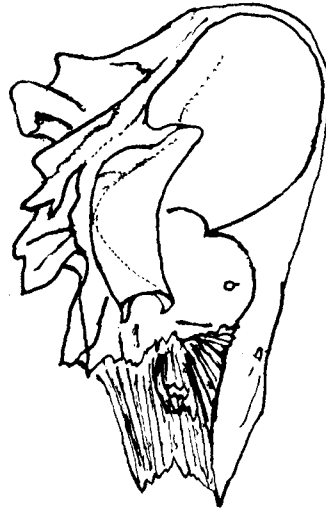
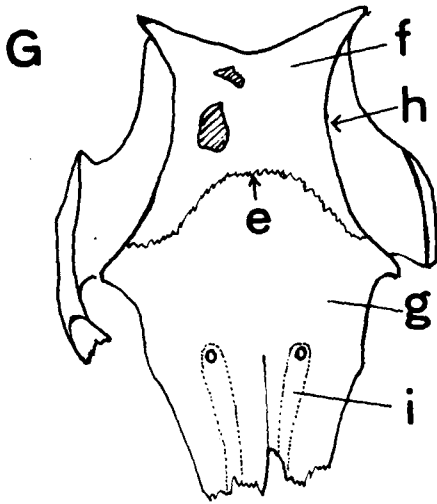
骨盤の全体の形態はほ乳類の骨盤に似ているように思われた。大腿骨がはまる部分の骨盤の窩には、腸骨・座骨・恥骨の三種類の骨の融合線が見えた。これはほ乳類のそれと共通で印象的であった。

生きたヘビクビガメはクーインダのクロコダイル・ホテルの中庭の池や、マンガレーの熱帯雨林で目撃した。

引用文献

- 1) 藤川隆男, 1990. オーストラリア歴史の旅. 朝日新聞社.
- 2) Strahan, R. 1991. Complete Book of Australian Mammals. Cornstalk Publ.
- 3) Moffat, A., 1988. Handbook of Australian Animals. Ray books.
- 4) 加藤嘉太郎, 1981. 家畜比較解剖図説(上). 養賢堂.
- 5) ローマー, パーソンズ, 1983 (原著 1977). 脊椎動物のからだ. 法政大学出版局. p146-147.
- 6) ハリディ, アドラー (編), 1987 (原著 1986). 動物大百科12両生・爬虫類. 平凡社.
- 7) Lehrer, J., 1990. Turtles and Tortoises. Headline Book Publ.





- A. 馬左前腕骨
 - a. 尺骨 b. 撓骨 c. 撓骨頭高
(bはaの中ほどで結合している)
- B. 馬右上腕骨(遠位端)
- C. 馬の蹄
- D. 馬の胸椎
- E. 馬の臼歯
- F. 牛の中手骨 d. 縦稜
- G. 豚の頭骨 e. 冠状縫合
 - f. 頭頂骨 g. 前頭骨
 - h. 側頭線 i. 眼窩上孔
- H. ヘビクビガメの外骨格
(スケールは5 cm)

オーストラリアで観察したアリについて

県立青少年センター 池田 博 明
横浜国立大学 酒井 春 彦

本報告では、アリのラフスケッチと概説は池田が、同定は酒井が担当した。

1 オーストラリアのアリ

Hadlington and Johnnton (1982) に従ってオーストラリアのアリの簡単な解説をしておく。なお、アリの一般的な解説(昆虫分類上の位置や階級制に関すること)は除いた。

“もっともよく知られた咬むアリはキバハリアリ(*Myrmecia*)属のブルドッグ(bulldog)・アントや、ジャンパー(jumper)・アントで、ブルドッグ・アントの方が大きく(25mm)、黒い(赤色または黄色の部分もある)。大きな顎で咬みついて、巣を激しく防衛する。野外のブッシュにいて、庭では見られない。ジャンパー・アントはもっとほっそりしており、小さく(約12mm)、ふつうは黒と黄色である。蟻塚を作り、一時に何度も妨害されると、短くとびはねながら攻撃する。

ふつうのアリは、シュガー(sugar)・アント、*Camponotus consobrinus*で、12mmぐらいの黒と黄色のアリである。咬まないが、甘いものに集まり、しばしば家に入ってくる。

ミート(meat)・アント、*Iridomyrmex* 属は小石でおおわれた大きな蟻塚を作る。たいていは蜂蜜を食べるが、黒または茶色の小型種のいくつかは家の中の厄介者だ。アルゼンチン・アント *Iridomyrmex humilis* は、偶然オーストラリアに侵入した。広食性で家庭の主要な害虫となったため、この蟻を撲滅するキャンペーンが始まった。3mm程度の茶色のアリで、決まった道を通り、つぶしても蟻酸のにおいはしない。このアリのいるところでは他の種は見られない。”

さて、アリの同定は難しく、日本でも日本蟻類研究会によって整理され始めたばかりである。オーストラリアのアリについても、タイラー博士は

「はじめにオーストラリアのアリは2000種と見積ったが、倍になるかもしれない。とにかく集めれば集めるほど新しい種が出て来る」と言ったという(今井, 1988)。大著『オーストラリアの昆虫』第2巻の膜翅目の章のアリの項は、このタイラー博士が書いている。

2 アリ観察日記

ケアンズ市内では(7月27日)、街路樹の葉を巻いて巣を作るツムギアリ *Oecophylla virescens* (図A)が目だった。オーストラリアに着いて最初の野外観察で会ったこのアリは珍しく、写真を撮ったり、何個か巣を開けて見たりしたが、妨害されると多数のアリが列をなして激しく威嚇してくる。この巣の中で卵のうをガードしているハエトリグモがいたのには驚いた。ツムギアリにはこの後、いたるところで出会うことになる。

地上に巣を作るアリのなかで、シルク・ネストという糸を張った大きな巣をつくる主なものが、このツムギアリとシリアゲアリの一部、トゲアリの一部である。ツムギアリの巣は20cm以上もあり、かなり大きかったが、シリアゲアリの巣は小さく、トゲアリの巣はもっと小さくなるという(久保田, 1988)。

ケアンズ市内では、アリはクモ観察のかたわら見ていったので、葉上または枝上を徘徊していた種類が目についた。シュロの葉上を徘徊していた全身黒色で、複眼の赤いミート・アントの一種 *Iridomyrmex* sp. (図B)、枝上を徘徊していたトゲアリの一種 *Polyrhachis* sp. A (図E)、シリアゲアリの一種 *Crematogaster* sp. (図D) などである。

ダーウィンのホテルの部屋には(7月27日)、小さなヒゲナガアメイロアリ *Paratrechina longcornis* (図C)が入りこんでいた。本種は、沖縄にも生息

する普遍種である。ホテル前での夜間観察では、アギトアリの一種 *Odontomachus simillimus* (図F) を見たほか、ミジングモが小さな黒いアリを捕食しているのを観察した。このミジングモはシモフリミジングモを大きくしたような感じで、糸に垂れ下がって捕食していたほか、葉裏で静止しているものもあった。Fは、大きな顎を持つ種類で、フォッグダムでも、ダーウインの植物園でも(8月2日)、地表を徘徊していた。

フォッグダムでは(7月28日)、駐車した道路の端で地面に巣を作っているアリを見かけた。これはミート・アント *Iridomyrmex purpureus* (図H) だった。ジャビルへ行く途中のガソリン・スタンドの所では、アギトアリ(図F)と黒色で背側の突起の目だつトゲアリ *Polyrhachis* sp. B (図G) を見た。GやHはツイン・フォールやリッチフィールドでも、見られ、より湿潤なパームストーンでも見られたので、普通種なのであろう。Gはナングルウルでは(7月30日)、樹上で15頭ほどが頭をつき合わせてサークルを作っていた。サークルの中心部には動物の死骸も見られなかったので、樹液でも分泌されていたのかもしれない。

7月30日に、アムバンバン・ピラボンで見た体色が淡いアメ色で、眼の割合が大きいアリは、*Opisthopsis* sp. (図I) であった。この属のアリは、動作に特徴があった。ちょうどコマ落し映画のようなギクシャクした動きをするので区別しやすいと思う。ツイン・フォールやクーインダ、リッチフィールドでは、この近縁種である *Opisthopsis rufithorax* が見られた。この種の図は描いていないが、全体としてIによく似ていて、腹部の後部が黒色である点が異なっていた。クーインダでは、形態も動作も、この種に擬態したアリグモを見た。

クロコダイルホテルの近くの低い土手の穴から出入りしていたアリ(8月1日)は同定できなかった。

ツイン・フォールや(7月31日)、リッチフィールド国立公園では(8月3日)、トゲアリの一種

(図G)や、ミート・アント(図H)、*Opisthopsis rufithorax* (図Iの近似種)が見られた。そのほかに、ツイン・フォールでは、Eによく似ているが、やや大きく、腹柄の形が違う種類がいたが、この種は同定できなかった。また、リッチフィールドでは胸部突起が二叉の微小なトゲアリの一種 *Polyrhachis* sp. C (図K) も見られた。

やや降水量のある地域では、これまでと異なる種類も見られるようになった。まず、ダイントリーで(8月5日)、ミツツボアリの一種 *Leptomymex* sp. (図L) がいた。この種はパームストーン国立公園でも見られた。腕が細く長く長いので特徴がある。ダイントリーには他にツムギアリやシリアゲアリの一種(図D)も見られた。

パームストーンは(8月6日)、乾燥地帯では見られなかった本格的な熱帯雨林だった。ミツツボアリのほか、地表では、背面が青黒く虹色に光るアリ *Rhytidoponera* sp. (図M) やEに似たアリ(図N。同定不能)を見た。

ダנק島では(8月7日)、浜辺に住む小さいアリを見たが、同定できなかった。

ケアンズ市内の植物園の夜間観察で見たシュガー・アントの仲間のオオアリの一種 *Camponotus* sp. (図P) は、今回一番の大型種だった。この仲間は主に夜行性であるらしい。Pよりもやや小型で、上顎に歯が多い *Camponotus ephippium* (図Q) も見られた。

参考文献

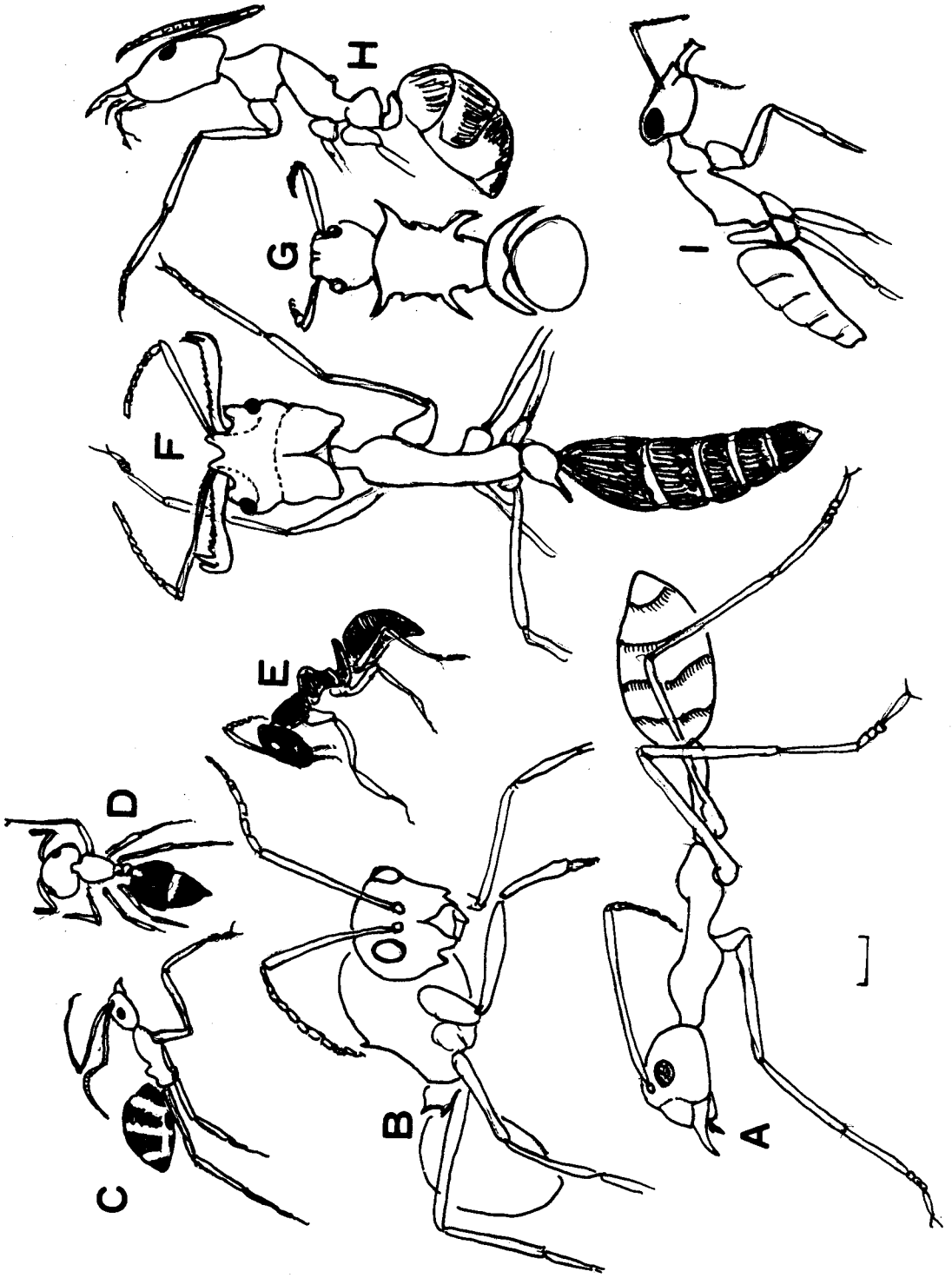
CSIRO, 1991. Insects of Australia (2nd ed.). 1137 p. Melbourne Univ. press. Australia.

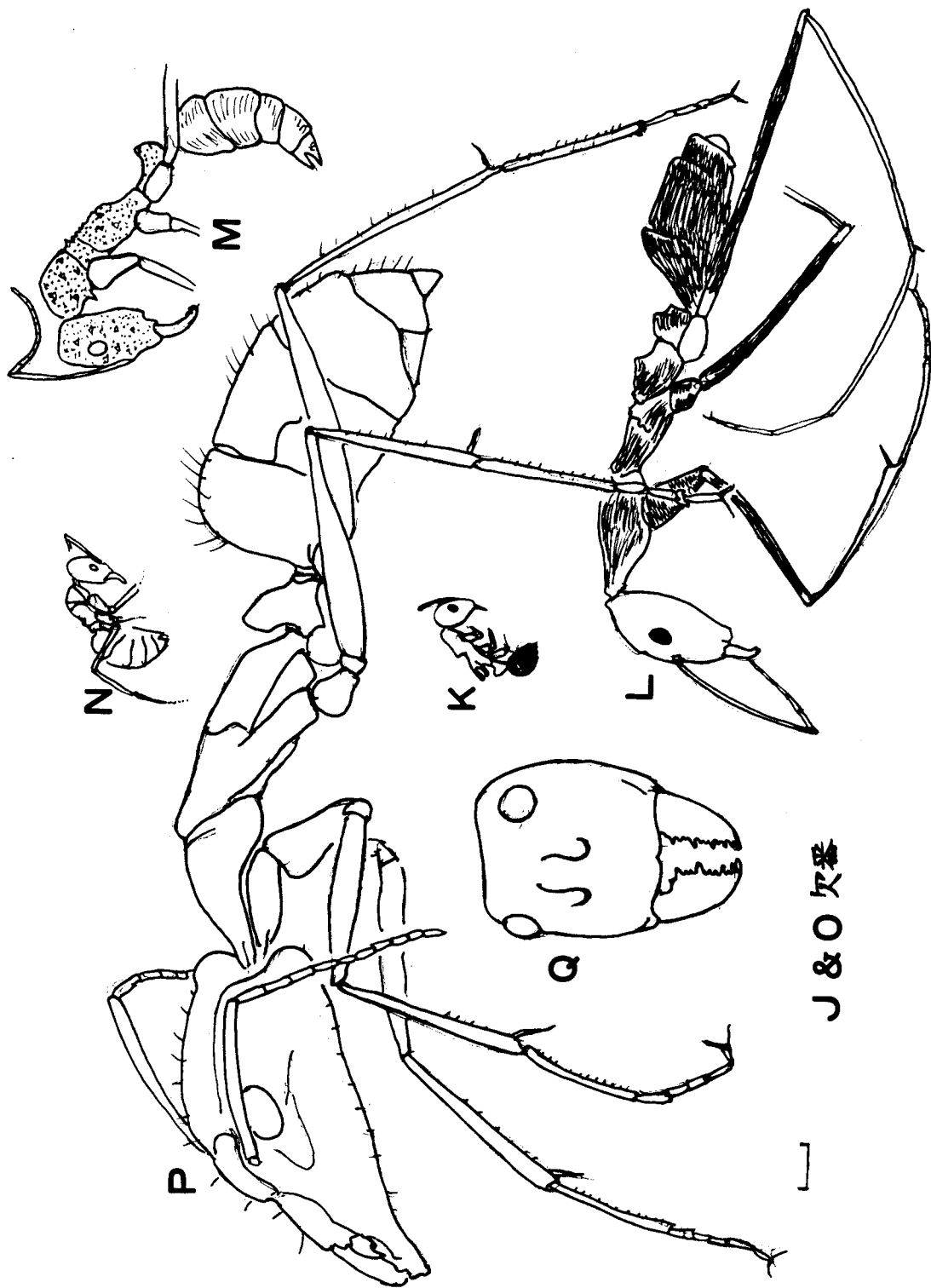
Hadlington, P. W. and J. A. Johnston, 1982. An Introduction to Australian Insects. 116 p. New South Wales Univ. Press. Australia.

今井弘民, 1988. アリからのメッセージ. 176 p. 裳華房.

久保田政雄, 1988. ありとあらゆるアリの話. 185 p. 講談社.

(図のスケールは1 mm。同じ倍率で描いた)





J & O 尺蠖

—

大地のシロアリと樹上のシロアリ

県立青少年センター 池田博明

リッチフィールド国立公園に行く途中でマグネチック・ターマイトという、すべて蟻塚の平面が南北を向いているというシロアリの塚を観察した。その近くにカテドラル・ターマイトというシロアリの蟻塚があり、ガイドのテリーやピーターが蟻塚を割って中を見せてくれた。このとき、中にいたシロアリのsoldierとworkerが図1Aである。リッチフィールドでは樹の茎に黒い巣を作っているシロアリがいた。当然さきほどのカテドラル・ターマイトとは種類がちがうはずである。地上に蟻塚を作るものと樹上に巣を作るものでどれほどのちがいがあのだろうか。このシロアリのsoldierとworkerは、図1Bのようだった。ずいぶん似た種類だと感じた。とりあえずオーストラリアのシロアリについて調べた結果を記しておく。

1 オーストラリアのシロアリ

世界の熱帯・亜熱帯地域では2300種以上が知られているが、オーストラリアでは258種が記載されていて、少なくとも90種が未記載である。

主なカーストは生殖カースト、兵隊カースト、働きアリカーストで、まず5科に分けるときは羽アリ(生殖カースト)か、兵隊カーストで同定する。特に採集しやすい兵隊カースト頭部での分類法が発達している。

その5科(42属を含む)とはMastotermitidae(オーストラリアに固有の科である。1属1種)、Kalotermitidae(8属46種)、Termopsidae(2属5種)、Rhinotermitidae(5属30種)、Termitidae(25属266種)で、HodotermitidaeとSerritermitidaeの科の種類は記録がない。

また、兵隊アリの形態は大きくふたつのタイプに分かれる。顎の発達したmandibulate typeと顎が退化して頭部がつき出た(額角rostrumという)nasute typeである。

オーストラリアでこのタイプの兵隊を持つもの

は6属あり、そのうちの5属が固有属で、科はすべてTermitidaeであった。

今回比較したシロアリの兵隊はどちらもnasute typeで、おそらく*Nasutitermes*属であろう。

nasute typeでは、*Tumulitermes*属も大きい(約50種、18種が記載)し、全土の乾燥地に広く分布するが、*Nasutitermes*属と異なり、兵隊に2形(頭幅の広いものと細いもの)があって、ほとんどは完全に地下性で(少なくとも5種は蟻塚を作るが)、他の蟻塚に侵入するという。

なお、マグネチック・ターマイトはTermitidae科の*Amitermes*属(mandibulate type)の一種であろう。

Workerはあまり形態分化していないという。

2 *Nasutitermes* 属

Nasutitermes 属はオーストラリアに約30種いるうちの19種が記載されている。全土に分布しているが、特に北部に多い。兵隊アリは典型的なnasute typeで、サイズも均一、頭部上面に特別な構造は見られない。*Tumulitermes* 属では兵隊サイズに2形あり、しばしば触角の後ろの頭部にくびれがあるので区別できるだろう。

この属は大地に蟻塚を作る種もいれば樹上に巣を作る種もある。コロニーには1~2百万頭がいる。代表種は、ときに7mもの高さの蟻塚を作る*N. triodiae*と、樹に黒く丸い巣を作る*N. walkeri*である。種の検索表がないので、今回採集したそれぞれが、この種にあたるものかどうかは分からない。

3 形態比較

蟻塚の種(仮にM種とする)のsoldierの頭部はこげ茶色で腹部は白色、体長3.46mm(頭突起先端から腹部端まで)、頭長1.80mm、頭幅1.25mm、触角は12節(基節を入れて)であった。M種のworkerの体色は白色で、体長4.32mm、頭長1.32mm、頭幅1.75mm、触角は15節であった。

樹上巢の種（仮にS種とする）の soldier は色はM種同様だが、ややほっそりしており、体長3.65 mm、頭長1.32 mm、頭幅0.98 mm、触角は13節であった。S種の worker も色はM種同様で、やや小形、体長3.84 mm、頭長1.08 mm、頭幅1.10 mm、触角は13節であった。どちらも体内の臓器が体表を通して見えた。

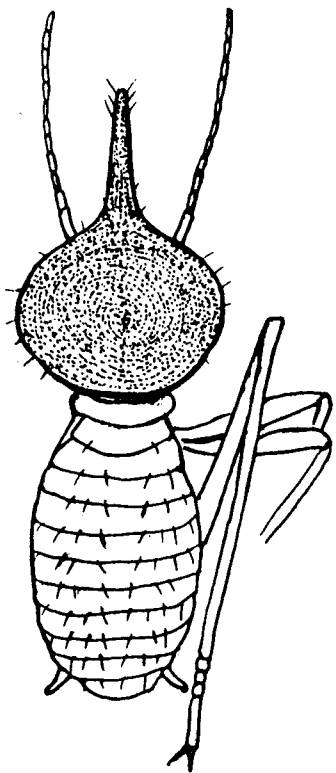
4 ファウナの特徴

オーストラリアのシロアリ相の顕著な特徴は原始的な遺存属の存在である。固有の科Mastotermitidaeに属する *Mastotermes darwiniensis* は現生の最も原始的なシロアリで、第三紀の化石によると他の大陸にもいたものの、唯一生き残った種である。Termopsidae科の2属は Gondwana の生き残りである。一方、Hodotermitidae科やキノコを育てる種が生息していないのも特徴である。

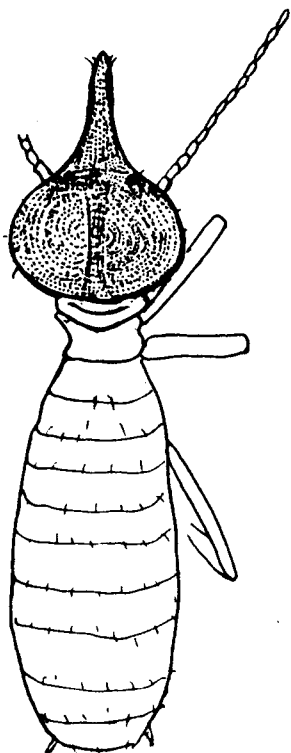
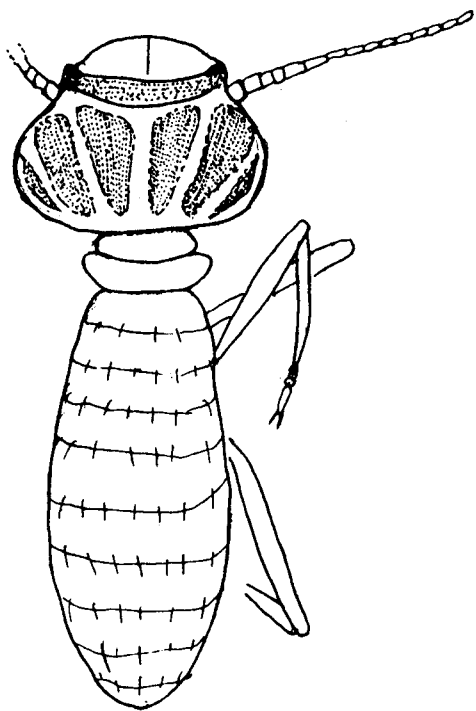
分布からは特に興味ある点がふたつある。ひとつは熱帯雨林内の種の少なさである。これはコンゴやギアナの熱帯雨林ときわだちがいである。ふたつめは特定のタイプの土壤にはある種のシロアリがいないことである。オーストラリア北東部の内陸の黒土は、隣接する砂漠のステップ土にはたくさんシロアリがいるのに、ほとんど避けられている。重い土という物理的特性から、乾燥すると広く深く割れ、雨のあとは水びたしになることがシロアリの生存に不適當なのだろう。熱帯オーストラリアに広く分布する *Mastotermes darwiniensis* も熱帯雨林や熱帯雨林から運ばれた土壤には見られないし、ケープヨーク半島のポーキサイト土壤にもいない。

参考書

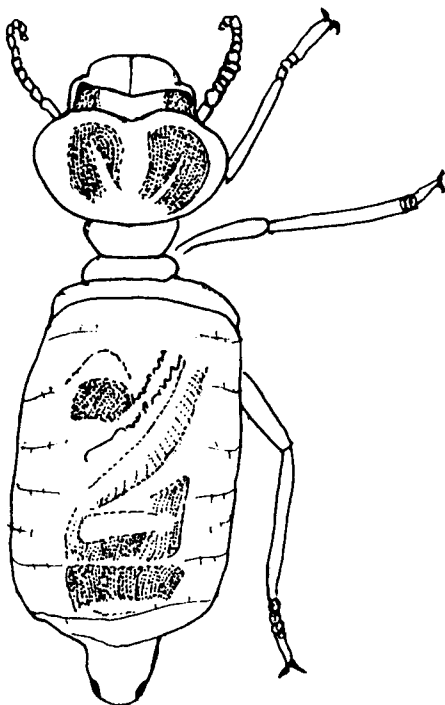
The Insects of Australia, Second Edition.
Melbourne Univ. Press. (1991)



A



B



乾季オーストラリアの真正クモ類

県立青少年センター 池田博明

今回の旅行前に七つのクモ類観察目標を立てた。その七つとは、①百種のクモを観察すること、②メダマグモやナゲナワグモ、アルキスなどオーストラリアに住む変わった造網や餌捕獲をするクモを観察すること、③ジョウロウグモの仲間の網構造の詳細部分の観察、④日本産のクモとの生態比較、⑤ポルティアハエトリを見ること、⑥セアカゴケグモやタチキジョウゴグモなど致死的な毒のあるクモを見ること、⑦分類学上問題のあるマルゴミグモのオスの発見である。②③については新海明氏が解説を書き、⑤⑥については私自身が解説を書いたことがある(梅谷, 加藤, 1989)。⑦は谷川明男氏の問題提起である。

このうち②③④⑤の四つを達成することができた。ひとつも達成されない場合もあるのだから、まずまずの成果だったといえよう。この成果のほとんどが同行の皆さんの協力によるものである。記して感謝したい。

このたびの報告にあたっては、日本との共通種がほとんどないこと、同定に時間がかかること、種名をら列しても専門家以外には意味もないだろうから、生態写真をもとにしたラフスケッチと生態解説を中心にした。

1. オーストラリアの真正クモ類数

オーストラリアで見たクモの図鑑は1冊だけで、収録数も少ない。今回見たクモのほとんどが載っていなかった。私たちが行く1週間ほど前にブリスベンで国際クモ学会の総会があり、それに出席された国立科学博物館の小野展嗣さんから、オーストラリアのクモの情報をいただいた。1986年のクイーンズランド博物館のレイヴンのまとめによると、オーストラリアで記録された真正クモ類は68科430属1876種で、特に種数の多い科はコガネグモ科(309種)とハエトリグモ科(252種)であった。日本産のクモが約1100種であることが

らすると、オーストラリアではまだまだ未記録種が多いものと考えられる。

なお、今回観察できたクモは約70種ほどであった。東京都内の自然林で東京蜘蛛談話会の観察会をした場合、一日4時間で、120種程度を観察できるところがある。それと比較すると、乾燥地にはクモも少ないと言えよう。

2. アミナゲグモについて

1) 夜間観察日記

1992年8月5日の夜のことである。ケアンズ(Cairns)の植物園(Botanic Garden)のジャングル木道でクモを探していた私は、染谷厚さんの「クモがいるよ」との声にユーカリの大木のそばに駆けつけた。地表60cm程度のところにいたクモはなんとメダマグモ科のクモの雌の成体で、四角いレースのハンカチのような網を持っていた(図1)。旅行11日目にして、とうとう見たいと思っていたクモに出会った!。昨晩も同じところを通ったのに見つけられなかった。さっそく夜間観察に来ていた他の仲間全員、ホタル探索の高橋孝洋さん、後藤好正さん、動物探索の甲田直弘さん、矢野雄一さんも呼んでオーストラリアに特有のこの珍妙な夜行性のクモを観察した。クモは糸で下向きにぶら下がっており、下を通る昆虫に四角い網をかぶせて採る。日本でもテレビやビデオなどで必ず紹介されるクモである。懐中電灯の光につられて羽虫が来て網に当たると、クモは網を一瞬大きく広げた。「おおっ!」と感嘆の声があがる。

近くの樹木で同属の別の種を高橋さんが見つける。みんなで探してみるとその辺りに5~6個体が網を張っているのがわかった。こんなにいるのならメダマグモ・ツアーが出来そうだという話になった。植物園は私たちの宿舎アカシャ・コート・ホテルから歩いて40分程度の距離にあり、熱帯雨林側は野外公園化して出入り自由である。

メダグモという名は顔の前面に大きな2個の目を持つところから来ている。しかし、ホテルに帰ってクモの顔をよく観察してみると、大きいはずの目がない。図鑑によると、この科には数属があり、メダグモ (*Dinopis*) 属は夜間でもよく見える大きな目を持つが、アミナゲグモ (*Avella*) 属や他の属のものはそれを欠いているという。造網位置もアミナゲグモはメダグモよりも高く、網の持ち方もちがうという。その辺はよく観察してこなかった。また明日の晩に行かなくてはなるまい。ちなみにレイヴンのまとめによると、この科はオーストラリアでは、2属15種記録されているという。なお、属の和名は今回の報告にあたって付けたものである。

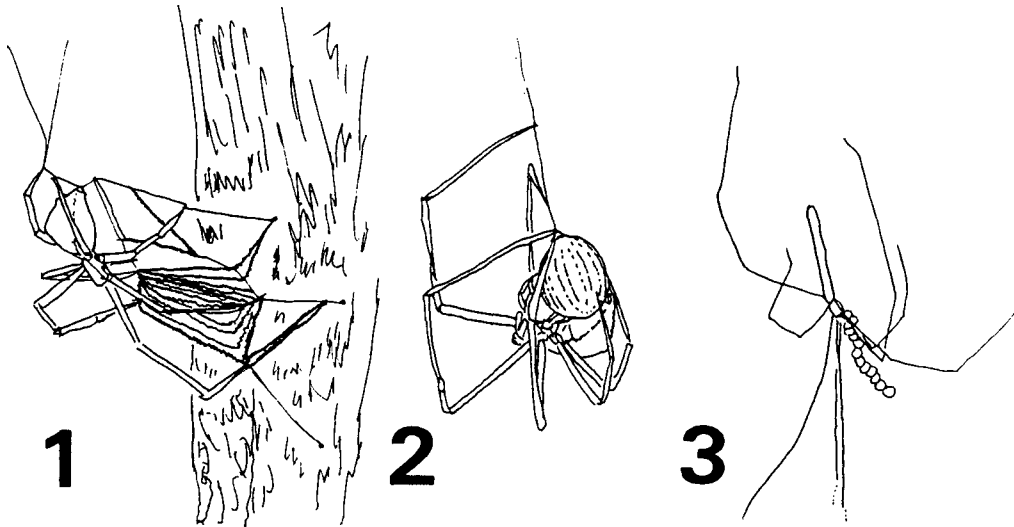
翌6日の夜の「ホテルとメダグモのツアー」に私のほか、青井さん、甲田さん、小嶋さん、後藤さん、三林さん、染谷さん、高橋さん、難波さん、樋口さん、山川さんが参加した。30分後にタクシーで迎えに来てもらったが、30分の観察時間はあわただしかった。昨夜よりやや早く20時50分頃の観察だったが、造網しているのは3個体で、まだ造網していない個体が多かった。造網時刻はどの位の間かという疑問がわいた。

7日の晩は少し遅く出かけた。植物園に着いたのが21時25分頃で、児玉さん、森さんと一緒である。木道を少し入ったところで左側にウサギ大の

ネズミのような動物を見た。いったん静止した後で逃げていったこの動物は、後で図鑑で調べるとバンディクートだった。クモの造網場所に着いたのは22時近かった。児玉さんがシダの葉裏から糸で吊り下がって地表40cmの空中で卵のうを作っている雌を発見した(図2)。この種の卵のう作成の記録や写真はまだ無いかもしれない。大発見である。タクシーで女性二人を帰してから継続観察することにした。22時25分以後藤さんが来た。私は野帳をどこかに置き忘れてしまい、搜索で皆さんに迷惑をかけてしまった。野帳は結局出て来なかった。私は程原さんに借りたメジャーで造網位置を測定し、支えの糸の構造を調べた。体の大小と造網位置は相関がないようだ。昨晚と同じ場所に同じ個体が造網していた。

後藤さんと交替で卵のう作成行動が終わるのを待った。22時に発見した時点で卵のうは完全に球形に仕上がっていた。色も枯葉のような茶色だった。それでもクモは外側の補強に余念がない。結局卵のう作成が終わって、クモが卵のうの下に垂れ下がったのは23時04分だった。これは休息の姿勢なのだろう。そのままの姿勢で1時間以上たつたので、私達はホテルへ帰った。

8日の早朝、撤収時刻を確認するために再び植物園に来た。ケアンズの6時はまだ暗い。6時30から空はうす明るくなり、7時ではだいぶ明るくなる。



7時40分に雄鶏が鳴いた。8時になっても虫を捕食中のものが2個体いて、幼体3頭は網を張って待ち伏せ体勢だった。大型個体の方がやや早く(7時頃)造網を止めて他の場所に移動してしまうようだ。もっともこの朝、大型個体は2頭しか見えない。出発が近いのでホテルへ戻った。

2) アミナゲグモとはどんなクモか

アミナゲグモは篩板類に属し、日本にいる代表的な篩板類はウズグモやマネキグモである。これらのクモの糸には絹糸帯という特殊な構造があり、これで獲物を捕獲することができる。アミナゲグモの持っている網の構造とウズグモの網中央のうずまき状のかくれ帯は大変よく似たものである。この投網部の作成行動は^{アメリカのコロイドン}コスタリカのW・エバーハードが報告しているが、それによると円網作成行動と共通点が多いという。網の起源を考えると重要な位置を占めるクモである。

ちなみに、日本で出版されている本の中で紹介されたメダマグモの網構造の図は餌を待ち伏せている時の支え糸が記されておらず、誤りである。写真には支え糸が写っているのだが。

3. ジョロウグモの網構造

ジョロウグモの網は「五線譜のようだ」と言われるが、それは足場糸を切らずに残すからである。日本では珍しくもないジョロウグモだが、世界のジョロウグモ属のなかでは、網構造にしる、生態

にしる、特異なところがあるようだ。その特徴のひとつに網の分枝糸や二分割糸の存在がある(新海明, 1992)。このような構造がオーストラリアのジョロウグモ属にあるかどうかを調べてみた。いくつかジョロウグモ属と思われるクモを見たが、分枝糸も二分割糸も無かった。しかし、くわしい検討はこれからである。

4. 卵のうガードと同居

(1) 卵のうガード

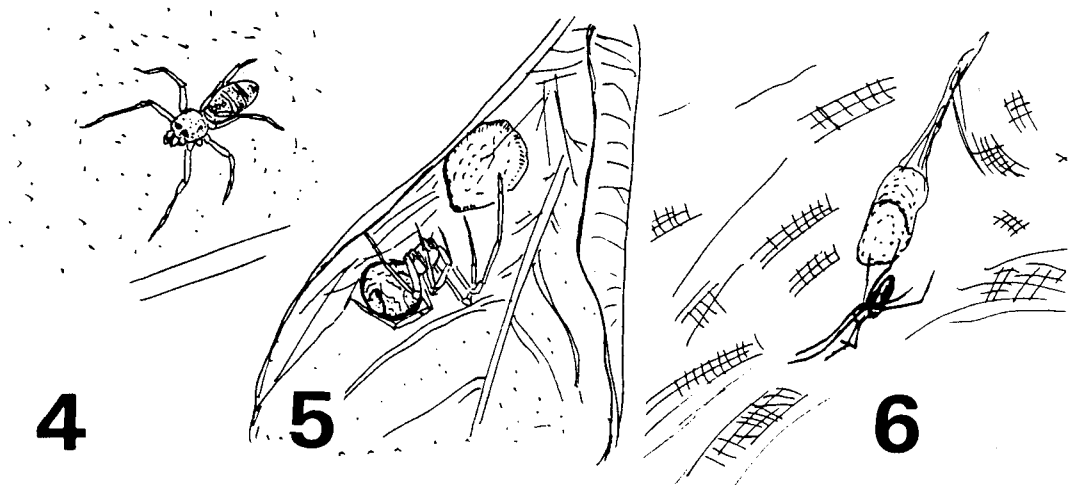
産卵を終えたクモの雌は卵のうをガードすることが多い。ガードにはいろいろなやり方があり、日本産の種と近縁の種は同様の方法を採用していた。観察できた卵のうガードの様子を報告する。

①数珠状に卵をくわえるユウレイグモ(図3)

もっとも珍奇だったのは、8月5日の夜、ケアンズの植物園でシダの葉裏にいた細い緑色のユウレイグモで、一列に並べた卵を口にくわえていた。日本のユウレイグモは卵を少しの糸でボール状にかがって口でくわえて運ぶが、棒状に連ねるクモは初めて見た。翌朝になると卵はふ化して子グモになっていた。

②ツムギアリの巣内に卵のうを作るハエトリグモ(図4)

樹木の葉をつづり合わせて巣を作るツムギアリの巣内に住むハエトリグモを見つけた。7月27日、ケアンズ市内の街路樹である。アリの巣の先の方



に住居があり、その中に卵のうを持っていた。すでに幼体がふ化していた。虹色に輝くハエトリグモである。

③ 枯葉内に作るヒメグモ (図5)

ナングルウル¹の熱帯雨林には枯葉内に卵のうを作るヒメグモの一種がいた。このような習性は日本のヒメグモに似ている。

④ 網内に吊るスズミグモ (図6)

乾燥地のユーカリの疎林でかなり目だつのはこのスズミグモの幼体とその網であった。しかし、成体は少なく、ダーウインの植物園とケアンズの植物園(後藤好正さん発見)で見ただけである。後者は網中央に卵のうを吊り下げて、ガードしていた。外観は日本のスズミグモそっくりであった。

⑤ 樹皮上のボロ網内に吊すガケジグモ

ダンク島のココヤシやソテツの樹皮の表面はボロ網で被われている。この網の主はガケジグモであった。網の中央に卵のうが吊ってあった。

⑥ 糸いぼにつけるコモリグモ (図7)

ダンク島の海辺で森洋子さんが発見したハイロコモリグモ(仮称)はちょうど卵のうを糸いぼに付着させていた。捕らえたところ、卵のうを触肢で持った。

⑦ 口でくわえるアシプトヒメグモ (図8)

ケアンズ市内のツツジに似た垣根の葉先にアシプトヒメグモが卵のうを口でくわえて造巢してい

た。日本産のものより小型であった。同じ種類はケアンズの植物園内の淡水湖の周囲のカヤツリグサの先端にもたくさん生息していた。

(2) 同居

① ジョロウグモの網に¹シロカネイソウロウグモ *Argyrodes antipodiana* が居候していた。

② ハイイロクサグモ(仮称)の網に豪州チリイソウロウグモ(仮称)が居候していた。

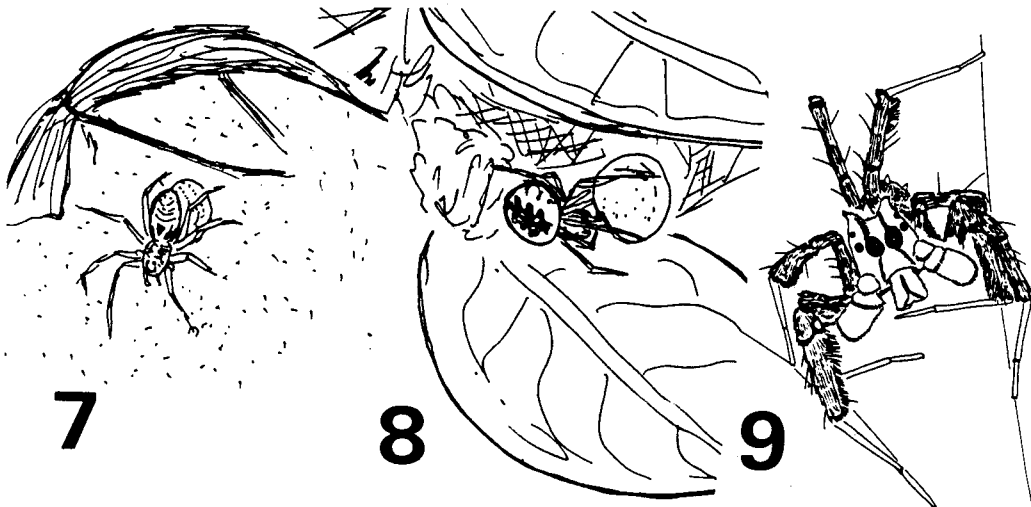
③ ダイダイヒメグモ(仮称)の網の中央に枯葉が吊ってあり、その葉上に雄がのっかっていた。この葉の中には雌がいて、雄は雌の最終脱皮を待っているのである。網の下部には別の雄がいた。このクモの網は下部にシート網を持つ不規則網で、日本のヒメグモ *Achaearanea japonicus* と同じ構造である。交尾戦略も共通と思われる。ただし、クモはヒメグモよりやや大きい。

④ パームストーン(Palmestone)国立公園内で豪州ギンナガゴミグモ(仮称)の雌の網に雄が同居していた。この雌雄はともに成体だった。

⑤ ダーウインの植物園のスズミグモ雌成体の網に雄と豪州チリイソウロウグモが同居していた。

⑥ 集団性のクモ

7月30日にナングルウル(Nanguluwur)の疎林で秋山守さんが見つけた集団性のクモである。私は死骸や殻しか見なかった。まだ詳細不明である。



5. ポルテアハエトリ (図9)

7月30日、ナングルウル(Nanguluwur)のアボリジニの壁画のそばのクサグモの棚網の上部迷網のところに入り込んでいるポルテアハエトリ *Portia fimbriatus* を高橋孝洋さんが見つけた。雄の垂成体だった。このハエトリは通常のハエトリが網を作らず、いわば徘徊性のクモの進化の頂点に達したのに対して、自分の網を作って餌捕獲をするほか、他種の網に入りこんでは網にかかった餌を盗んだり、ときには網主を襲って捕食してしまうという万能のクモである。その体形はほとんど枯葉屑のようであり、餌捕獲以外の動きも緩慢なため、見落としてしまう人が多い。よほどの眼力がないとクモだということが分からないクモである。脚にはえているトゲのみごとさといい、見れば見るほど進化の妙を感じさせてくれる生き物である。このクモの生態や進化上の問題点については既に別書で紹介した。

6. 毒のあるクモ

『オーストラリアの危険な生物』の10傑にクモが数種類挙げられている。最も有名な毒グモはシドニージョウゴグモ *Atrax robustus* であるが、このクモは分布がシドニー付近に限られるため、今回の旅行では心配する必要はなかった。同じ属でやはり猛毒のタチキジョウゴグモ *Atrax formidabilis* も分布的にはほぼ心配なかったのだが、旅行の初めにはそのことが分からなかったため、枯木や石の下で棚網を張り出しているクモにはずいぶん注意した。たとえば7月31日、クーインダへ向かう途中にトイレ休憩で立ち寄った場所で青木猛夫氏が見つけたユーカリの根元から張り出している大きな棚網をジョウゴグモの可能性もあると恐る恐る調べたが、中から飛び出して来たのはオオクサグモ(仮称)であった。

10傑にはもれたものの、毒グモとしては Redback spider として恐れられているセアカゴケグモがある。黒地に背面が真っ赤な体長1 cm程度のヒメグモである。野外トイレなどに造網していて、

知らずにうっかりかまれて命を落とす例があったという。しかし、最近はいい血清が出来て、80時間以内に血清を打てば命は助かるという。もっとも神経毒であるから後遺症が残る可能性は多い。なんとか見たいものと注意して探したつもりだったが、とうとう出会えなかった。

この他に組織毒を持つものにイトグモがある。日本でもこのクモは屋内に分布している。日本ではイトグモに咬まれた報告はないが、オーストラリアではひどい症例が知られている。7月28日にジャビルへ向う休憩所の天井に造網していたクロユレイグモ(仮称)を採ったところ、ガイドの Terry が「毒がある(poisonous)」と注意してくれた。ユレイグモで有毒の種は聞いたことがなかったため、驚いたが、形態が似ているため、イトグモと誤解しているのではないだろうか。

7. 謝辞

今回最大級のハエトリは8月4日にケアンズ植物園の樹皮上で、後藤好正さんが見つけたオオハエトリで、体長は約14mmあった。日本ではこんなに大きなハエトリグモはいない。また、大型のアシダカグモを見つけてくれた後藤さん、染谷さん、青木さん、ミツカドオニグモを見つけてくれた三林さん、トゲグモを見つけてくれた程原さん、松浦さん、その他いろいろなクモを見つけて下さった同行のみなさん、記して感謝申し上げます。

参考文献

Ben Cropp, 1985. Dangerous Australian. Bay Books.

Mascowd. Australian Spiders in colour.

新海明, 1992. ジョウゴグモの網と餌をめぐる問題. 遺伝, 46(8): 38-42.

梅谷献二・加藤輝代子(編), 1989. クモのはなし. I II. 技報堂出版

アボリジニの歴史と神話

県立青少年センター 池田博明

ケアンズの夜の公園にはアボリジニの酔っぱらいが多いこと、生活保護を受けているアボリジニは手当をもらおうとすぐに酒代にしてしまうことなどを聞いて、心が痛んだのは私だけではあるまい。

社会経済的には現在、アボリジニは四つの領域に分けられる。①古来の住処に移り住み、伝統的に生きようとする人々（約5%）、②アボリジニ主体の町で牧畜や農業で自律する人々（20%）、③白人の中小都市近郊に住み、農業や牧畜、単純作業労働者として生活する人々（fringedweller. 34%）、④大都市での単純労働生活または失業（41%）。その収入の7割は政府の補助金である³⁾。

1 歴史

4万年ほど前に東南アジア方面から渡り始めた人々は狩猟・採取民族として大陸に広がり、500近い部族、200以上の言語に分かれた。特定の土地を季節変化に従って食料を求めて動き回るのには小集団の方が都合良かった。無文字社会だったため伝承は年長者から年少者へと口伝で伝えられた。アボリジニはけっして無作為に放浪していたわけではない。かれらは自然環境をよく理解し、時期と地域を選んで、旬の食料を得るのを目的としていた。

1770年にキャプテン・クックがオーストラリアを発見した時点でもアボリジニは狩猟採取民族だった。クックはアボリジニを「不平等によって犯されることのない静寂の中に暮らしている。彼らと一体化した大地と大海は、生活に必要なあらゆる事物を満たしている。豪華な屋敷も家財もない。しかし、彼らは素晴らしい大地で生活している」と描写している。流刑植民地として白人が入植し始めたのは1788年1月26日だった。この日から北米におけるインディアンと同様の異文化接触の不幸な歴史が始まった。入植者の持ち込んだ家畜

（羊や馬、牛、豚）も問題だった。家畜はアボリジニの食料源の草木を食べ、水を飲む。土地を奪われ、食料や水の確保が危機に頻したアボリジニの生活は大きく変化した。砂糖・小麦粉などの栄養価の偏った食品、酒やタバコの害、そして風邪や流行性感冒、気管支炎、はしか、梅毒といった「新しい病気」。人口が減少し始める。

人口減少に輪をかけたのが、南部地域での虐殺であった。同化政策の失敗は政府の責任ではなく、アボリジニ自身に転嫁された。彼らは野獣と変わらないために同化できないのだと。そして『種の起源』から発展した「社会進化論」によれば野獣は自然に淘汰されるのが当然だと考えられるようになった。白人の入植から連邦の発足（1901年）までのわずか113年間にアボリジニの人口は四分の一に激減した。

19世紀後半になって居留地への保護政策（実質的な隔離政策）が取られるようになる。そして、第二次世界大戦で白人の徴兵による労働力不足を補ったのがアボリジニであった。戦後、同化政策を経て統合政策が始まったのは1960年代後半である。この動きは当時の人権拡張運動や学生運動と関係がある。統合政策は少数派の文化を認めながら全体としてひとつの社会を構成しようという政策である。

私たちがモスマン市の近くをバスで通ったときに現地ガイドのユキ・ホリキが、アボリジニとアイランダー（島民）のそれぞれの文化を残しながら教育を進める小学校があると言っていたが、たぶんそういった施策も統合政策の賜ものなのであろう。文化人類学によってアボリジニの社会形態と土地の結びつきが理解され、土地所有権が回復する動きも始まった。

1970年代には労働党政権によってアボリジニ政策へのアボリジニ自身の参加が試みられた（自己

決定政策)が、政権交代によって完結しなかった。次の政権の自己管理政策はアボリジニが自分で問題を解決できるように教育環境等を充実させる点に特徴があるとされる⁴⁾。

2 神話

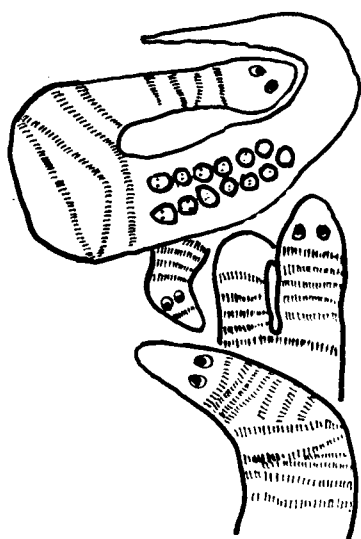
アボリジニの宗教は「ドリームタイム」(神々の時代)といわれる創世紀の神話に深く関わっている。宗教はトーテミズムとして知られている。Stradbroke島 Nunukul族の Oodgeroo (英名はKath Walker)は1920年に生まれた。彼女はアボリジニの最初の抵抗作家の一人であり、1960年代初頭の土地所有権の改正に深く関わった。『Stradbroke Dreamtime』の前半部は島での幼年時代の思い出であり、後半部はアボリジニの民話である。著者が子どものときに聞かされた古い話と、伝統的なアボリジニのスタイルで書かれた新しい話から成っている。古い方からひとつを訳出する²⁾。

生命の始まり

“夢見どき、大地はまだ眠っていた。なにも育っていないし、なにも動かない。すべてが静かでひっそりしていた。ケモノも鳥もトカゲも地面の下で眠っていた。

ある日、虹の蛇がまどろみからめざめて、地下を通りぬけ、石を動かした。蛇は外へ出て、あたりを見回した。それから地上をあらゆる方向へはいまわった。あんまり広く動き回ったので、疲れてしまった蛇は輪になって眠った。蛇がくねったところは跡が残った。大地じゅうを回った後で蛇は最初に出てきた場所にもどり、カエルに声をかけた。「出ておいで」

カエルはとてもゆっくり上がってきた。カエルの腹は重かった。眠っている間に水をたくわえていたのだ。虹の蛇が腹をくすぐるとカエルは笑い出し、水はあふれて地上の蛇のはい跡をうるおした。こうして湖や川ができたのである。



マンダンガリー域(西部オーストラリア、キンバリー)の岩壁画の蛇像(一部、模写)『Rock Paintings of Aboriginal Australia』(1988)の写真から。

図 マンダンガリー域の蛇像

草がしげり、木が芽生えて、地上の生命が始まった。

すべてのケモノや鳥やトカゲがめざめ、「生き物の母」なる虹の蛇につづいて、大地に現れた。地上は幸せだった。それぞれが生活し、群れを作って食べ物を探した。カンガルーやワラビー、エミューの群れは草原で暮らした。トカゲは岩場で生活し、鳥は空を飛び、樹の間で生活した。

虹の蛇はみんなが守るべき掟を作ったが、怒りっぽいものやめごとをおこすものもあった。虹の蛇は言った、「わが掟を守るものにより報酬として、ヒトのかたちを与えるつもりだ。ヒトとその子、その子のこどもは永久にこの大地を歩いて、歩いたところがヒトの土地となろう。わが掟を破るものには罰を与えよう。二度と歩くことができないように、石に変えるつもりだ」。

そして掟を破ったものは石に変えられ、山や丘になった。山や丘はずっと立ったままで、その足もとで食べ物を探すものたちを見つめている。

一方、掟を守ったものはヒトの形を与えられ、

それぞれケモノや鳥やトカゲといった自分の原形をトーテムとして与えられた。だから部族ごとに自分のトーテムを知っている。カンガルー、エミュー、カーベット・スネーク、まだまだたくさんある。そして虹の蛇はいくら腹がすいても、自分のトーテムを食べないように命じた。このようにして全員に食べ物が用意された。

そして部族は「生き物の母」なる虹の蛇に与えられた土地と一緒に生活した。みんなは土地は常に自分たちのものであり、この先も誰にも奪われないことを知っていた。”

3 黄色い鼠

井上ひさしはオーストラリアを題材にして『黄色い鼠』という小説を書いた(1977年⁵⁾)。井上ひさしの作品のなかで、この小説はほとんど話題にならないが、異色作であり、私は好きである。むろん、「黄色い鼠」とは日本人のことだ。

第二次世界大戦中の昭和17年、南オーストラリアのパーメラの収容所から脱走した佐藤修吉(38歳)が残した手記というかたちを取っている。日本人捕虜の集団脱走は海軍軍令部の作戦によるもので、砂漠を突っ切ってアリススプリングスまで行き、日本軍と落ち合うという無謀なもの。アボリジニの最大部族であるアランタ族のルルバ老人を収容所の所長が道案内に付けてくれた。捕虜という厄介払いをしたい所長公認の脱走であると思えたが、現実はその甘くはなかった。すぐにアメリカ兵の追手が脱走者を射殺に来た。仲間はほとんど死んでしまう。残った四人はルルバ老人、佐藤、岩崎、そしてあくまでも無謀な作戦を遂行しようとする軍人・江藤だった。砂漠での苦しい道行きが続く。安部公房の『終わりし道の標べに』砂漠版といったおもむきがある。

悲惨な道行きの中で、佐藤は老人からアボリジニの文化をいろいろと教えられる。井上ひさしの意図はアボリジニの文化を鏡にして、戦争を支えた理論のひとつ、人種主義的な民族主義を批判す

ることだと思われる。異文化の発見から始まった文化人類学のもっとも重要な成果は文化的相対主義であり、アメリカの文化人類学者クラックホーンは人類学を「人間のための鏡」と形容している。『黄色い鼠』では、ルルバ老人の言葉としてはっきりと「人間はただひとつの種」であり、それを認識しない文明人、ゲルマン民族や日本民族は「愚かもの」と書かれている。

文化的相対主義を芸術に高めた作品の例としては、ヴォネガットの小説『スローターハウス5』やアルドリッチ監督の映画『ワイルドアパッチ』があるが、アボリジニをテーマにしたもので日本で読める作品は多くなく⁶⁾、まして日本の作家による傑作はたぶんこれ一作だけであろう。

引用文献

- 1) 藤川隆男, 1990. オーストラリア歴史の旅. 朝日選書.
- 2) Oodgeroo Nunukul. 1972. Stradbroke Dreamtime. Angus & Robertson.
- 3) 関根政美ほか, 1988. 概説オーストラリア史. 有斐閣選書.
- 4) 鈴木清史, 1966. アボリジニ. 明石書店.
- 5) 井上ひさし, 1977. 黄色い鼠. 文藝春秋社.
- 6) ハーバード, 1975. かわいそうな私の国. サイマル出版会.

アボリジニの昆虫由来の生薬について

県立青少年センター 池田博明

ガイドのピーター(Peter)からアボリジニがゴキブリをすりつぶして薬がわりに使っていたとか、ツムギアリをつぶして食べていたとかいう話を聞いて、アボリジニの生活と昆虫の関係について興味があった。さいわい、私たちが旅したノーザンテリトリー地域でのアボリジニの生薬を調査した詳細な報告書が出ていたので、その中から昆虫由来の生薬の部分を抜粋して紹介しておきたい。

(1) ゴキブリ

アーネムランドには数種類のゴキブリがいるが、もっとも一般的な種類は *Cosmozosteria macula* と *Cosmozosteria* sp. である。どちらも黒色で無翅、体長2-3cmだが、前者は中胸背板の両側に赤い点があり、尾角も赤い。後者は第一体節と第三体節の両側にオレンジ色の縦条を持つ。これらは住居内に侵入することはない、個体数は季節によって変動するが、そう大きくはない。

処方は、まるごと火の近くの灰であぶってから、しばって体液を出す。特にエイやstonefishにかまれたり、さされたときにこの液を直接つける。すぐにしびれた感じがする。一度つければ十分で1時間以内に痛みがやわらぐ。火を使わずに石の間やただ手をつぶすだけで刺されたところになる地域もある。

ダーウインやガルフ地域で報告されている。

体液中にまひを起こす揮発性の物質が含まれているのだろう。

今回8月1日に Reek で見たゴキブリは点も条もなく、別の種類であった。

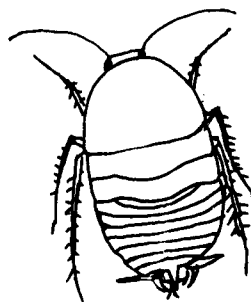
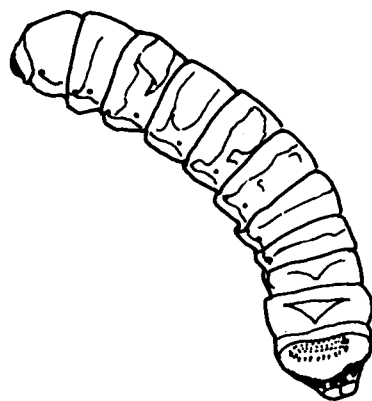
(2) 行列毛虫の巣

ヤガに近縁のこの属 *Ochrogaster* の蛾の雌はアカシアのような粗な樹皮下に隠れて多くの卵を産む。卵からかえった小さな毛虫は食用とする葉のある枝先まで道を作る。集団になった毛虫は共同巣として大きな糸製の袋を作る。行列行動は夜間

毛虫がまれに巣を離れて食物を探索するときに見られる。袋には排せつ物、脱皮殻、抜けた毛が付着し、これが激しい皮膚の炎症の原因となる。この蛾は内陸の乾燥地で見られる。

幼虫の糸製の巣を人工の皮膚のように包帯として使う。まず袋の両面の排せつ物や毛を除いてきれいにする。毛は多くの人にアレルギー反応を起こすので、目や皮膚への接触は避けるべきである。袋の内側は捨て、汚れのないその下層を外して、ただれや火傷の上を保護する。

南部中央地域から報告されている。



上；イモムシ (*Xyleutes* 属)

下；ゴキブリ (8月1日, Reekにて)

(3) ツムギアリ

北部オーストラリアの街なかから熱帯雨林まで広く分布している、樹上に葉をつむいで巣を作る緑色のアリで、英名 green tree ant という。

学名は *Oecophylla smaragdina*。

処方では湯わかしに水を入れ、樹から採った巣を入れる。水の中で巣をバラバラにこわし、よくかきまわす。水はすぐに乳白色になる。火にかける部族もある。巣のかけらを取り除くが、卵は小さくてなかなか除けない。こうして出来た液をセキやカゼの薬として日に数回飲む。あるいは口をすすいだり、うがいに使ったりする。

女王アリはカゼの治療薬または単におやつとして、煮て腹部を食べる。かさぶたやかゆい部分の上で、つぶしてもよい。

ダーウィンやガルフ地域で報告されている他、西部オーストラリアでも報告されている。

(4) シロアリの蟻塚

オーストラリアのシロアリのうち、5分の1が蟻塚を作る。蟻塚の低いものは60cmから、高いものは7mまで、種によって特徴がある。Na, K, Mg, Ca, Feなどに富んでいるが、これらの無機物の作用は分からない。

蟻塚の利用はノーザンテリトリー全域で見られる。壊して、すりつぶして、食べる。あるいは手のひらくらいの大きさのものをこまかく粉にして、ヤカン一杯の水（あるいはミルクや茶）に混ぜ、これを必要に応じてかきまぜて飲む。下痢の薬として広く利用された。粉々にする前に焼かれることや、あるユーカリの根元に出来るものが好まれる場合もあった。

ある所ではこの汁にミツバチを加えて、ミネラルを補給し、炭水化物の吸収を助けた。また、土の微粒子は腸内の毒物を吸着する。

赤茶色の蟻塚は妊娠した女性や陣痛期の若い女性によく利用された。

ダーウィン、ガルフ、ヴィクトリア・リバー、パークリー・テーブルランドで報告されている。

(5) 白い粘土

これは昆虫ではないが、蟻塚との関係で取り上げられている。集めて堅パンのように焼く。冷えたら粒状にしておくが、粉にして水に入れることもある。スプーン一杯程度を下痢のときに飲む。

ダーウィンとガルフ地域で報告されている。泥食は西部の医療のカオリン（白陶土）の使用同様、胃腸病に対するアボリジニの伝統的な療法である。ただし、食べ過ぎは危険である。

(6) イモムシ *Xyleutes* 属

オーストラリアにはこの属の蛾は種類が多く、幼虫は魔力のある虫として知られている。灰色の蛾は数日間だけ飛びまわり、交尾し、莫大な卵をうむ。イモムシは草に穴をあけ、樹皮下や根に通路を作る。まれに土中にトンネルを作って根を食うこともある。これによって、幼虫は乾燥や急な温度変化から守られる。通路内やトンネル内でさなぎになる。アカシアの大きめの根に住む幼虫が医療用として知られている。太った幼虫で10cm長、白っぽいクリーム色、体重は10~12g。タンパク質や脂肪のほか、チアミンやビタミンCも含まれている。高タンパク、高脂肪のため大切な食物でもある。

傷口を空気から保護し、組織から水分が失われるのを防ぐ。火傷や重傷を負ったとき、幼虫をつぶしたり、たたいたりして、傷の上に広げる。その上から衣服や包帯で覆って、24~48時間おきに新しいものに取り替える。

この虫の使用例はたくさん報告されている。例えばハリー・キッチングによると（1955年）、たき火に落ちて、腕にひどく火傷を負った赤ん坊がいたが、この虫をつぶしてつけ、布で覆ったところ、後で医者にかかったときにはもう直っていて、それはまさにドラマティックだったという。

引用文献

Aboriginal communities of the Northern Territory of Australia. 1990. Traditional Bush Medicines.

して
しま
自
現地
の打
なん
。生
た婦
げで
しく

提供
副所
ター
ー自
ンズ
植物
雄氏
その
研修
た。

成をさ
ば、全
した。
を嬉し
成果を
校長の
先での
射致し